

## 援助的サマースクールの研究IX (その6)

## A Study on Supportive Summer School IX (6)

鈴木 ちひろ

(東京成徳大学大学院)

石崎 一記

(東京成徳大学)

*Chihiro SUZUKI* (Graduate School of Psychology Tokyo Seitoku University)*Kazuki ISHIZAKI* (Tokyo Seitoku University)

## 要 約

本研究では、2010年度の援助的サマースクールの参加者27名のうち、初参加である小学校5年生で、自閉症の男児、H.S. について、期間中の本児の様子や行動をもとに、スタッフや参加者との関わりの中で、心理的居場所を見つけ、バディーに対して快・不快の両方を持つ甘え行動を行っていたと考える。

キーワード：自閉症、心理的居場所、甘え行動

## I. はじめに

東京成徳大学が主催する援助的サマースクールとは、「浴びるほどの自然の中での体験こと」「異なる年齢の集団の中での相互作用」「自立的な生活体験」を基本方針としている。今年で9回目を迎え、本年度は、小学2年生から高校3年生までの27名の参加者が集まった。サマースクールの中で、子ども達は親元を離れて自然の中で生活することで、ありのままの自己を表現し、発揮するようになる。また、スタッフにとっては、関わり方や運営研修の場となり、臨床現場として重要な経験となる。

本稿では、小学5年生の自閉症のH.S.に焦点をあて、期間中の行動や様子を整理し、スタッフや参加者の関わりの様子からHの心理的居場所や甘え行動について考察する。

## II. 事 例

## 1. 対 象

名 前：H.S (以降：H)

性 別：男子

年齢・学年：10歳・小学5年生

障 害：自閉症（知的の遅れを伴う）

以下は、アンケートによる事前調査による特徴である。

- (1) 生活習慣：普段、特に援助は必要ではないが、拭ききれない時があり、家では、トイレの後に下着を換えることがある。
- (2) 食事：偏食があり、学校、家庭で取り組み中である。生野菜（夏野菜）が特に苦手である。
- (3) 性格・行動：待つ、静かにしているなど、集団の中で長時間過ごせない。慣れてくる

と少しハメを外す事がある。主に穏やかな言動をするが、時折、興奮して大声を出したり、男らしい言動もある。

- (4) 対人関係：同じような立場の子どもと張り合う様子がみられるが、比較的交流はうまくいっている。

## 2. 参加の経緯

参加経験のある友人から教えてもらい参加した。普段の生活にはない新しい体験をさせたい。制約されることが多い子どもなので、思いきり活動してほしい。

## 3. 期間中の行動

### (1) 1日目

母親と一緒に受付を済ませ、「おはようございます。」と声をかけると、大きな声で元気よく「おはようございます。」とHは言った。2階講義室には、階段で行き、一番前を歩いていた。2階講義室に着くと、母親の隣の席に座った。その後、「名札を書きに行こう」と言ったが、何も話さず、母親にくっつき、動こうとしなかった。母親から「名札書くんできて連れて行ってもらって来たら」と声をかけられると、「どこで書くの?」と問いながら、歩き始めた。開会式では、保護者席の周りを歩き回っていた。1周回った後、扉の近くの保護者席に座り、足をブラブラさせていた。この間に、Hの母親から「Hは慣れてくるとひじをつかむくせがあるんですよ」ということが伝えられた。

外で、バスを待っている間、母親に、まだ「着かないの?」と聞いたり、フェンスに身を乗り出して、「まだー!!!」「もう、やだー!」と何度も言っていた。

バスに乗ると「お母さん! 行ってきます!」と涙を流しながら大きな声で言っていた。「着いたら何したい?」と聞くと、「お魚焼き食べる」「バーベキューする」「カレーライス食べる」と言っ

たり、アニメやドラマの歌を歌ったり、台詞をしゃべったりしていた。あまり聞き覚えのない曲があったため、「それ、なんの曲?」と聞くとHは「分からない」と言っていた。Hは、歌を歌ったり、独り言を言いながら、ひじをつまんできた。色紙にサマースクールでしたいことについて書くバスレクでは、色紙に「お肉食べる」といいながら、バーベキューやカレーなどの絵を描いていた。Hが書いている最中に「川遊びとかもするんだよ」と言うと、「川遊びするー!」と笑顔で言っていた。

その後、休憩場所のパーキングエリアに到着し、Hは、バスから一番に降り、ゆーじと一緒に手をつないで、道を横断していた。

ブルーシートに座り、「しゃけのおにぎり、好き」と言いながらしゃけのおにぎりを両手に持ちながら食べていた。食べている最中に、トトロが来て、お代わりのおにぎりを3つ貰うと、その内の2個を、また両手に持ちながら食べていた。そして、残りの1つを自分のポケットにしまっていた。バスの中に戻ると、ポケットに入れていたしゃけのおにぎりを食べていた。

サマースクールの宿泊場所に到着すると、一番初めに降りていた。施設に入ると、初めは皆と一緒に座っていたが、少しすると皆が座っている周りを歩き回ったり、クーラーの前に座ったり、部屋から出たりしていた。同じグループであるみーなに「こっちで一緒に座ろう」と誘われても、歩きまわっていた。時折、鼻歌を歌っていた。

施設にグループで探検に行く施設探検ラリーは、グループのメンバーと一緒にには行かず、研修室の中を歩き回ったり、研修室の後ろの隅に重ねられていた畳の上に寝転がったりしていた。トトロに、色紙を並べるのを手伝ってと言われると、始めは、ウロウロと歩き回っていたが、トトロやちこ、ゆーじが並べている姿を見て、Hも並べ始めた。「H、一緒に並べてくれてありがとう」と言うと、何も言わずに、また研修室の中をウロウロと歩き始め

た。

外に出ると、遊び場の中を歩いていたたり、木を触ったりしていた。はちに「木の赤ちゃんを助けてるんだよ。一緒に助けてくれるかな？」とHが言われると「木の赤ちゃん、助ける」と言って、スコップを手に持ち、草が生えているところを何度も掘っていた。なかなか木の芽を掘ることができず「もう、いや」と言って、スコップを落とした。「もういいの？ こっちにも木の赤ちゃんあるよ」と言うと、「どこ？」と言って、また掘っていたが、上手く掘ることができず、「できないよ」と言って、スコップを置いて、また歩きに行ってしまった。

夕食では、Hはごはんにしょうゆをかけ、トマト以外は全て食べた。食べている最中に「おいしい？」と声をかけると「おいしい」と笑顔で言っていた。その時に、「お腹ポポン、お腹いっぱい」とお腹を叩いていた。

夕食後に、星の観察と花火大会が行われた。星の観察では、ちことうーじに挟まれて川の字で横になっていた。「いっぱい、星があるね」と声をかけると、Hが上を見ながら「北斗七星。夏の大きな三角形」などと星の名前を言った後、「……star」と英語で何度も言っていた。花火大会では、移動するときに、列の先頭まで走り、追いかけていったうーじと手をつないで、先頭を歩いていた。花火大会が始まると、うーじから花火を一本もらい、その火をじっと眺めていた。その後、何本か花火をもらった後、その花火を回していた。Hが「綺麗」と小さくつぶやいたので、「花火、綺麗だね」と言うと、「綺麗だね」と繰り返し言っていた。何本目かの花火に火を着けようとした時に、「H、人にかかっちゃうからこっちから火を着けよう」と声をかけたが、その場から動かなかった。そのようなことを何回か繰り返していると、R.Yに花火の火花が少しかかってしまった。R.Yは「うわー！」とびっくりしており、「熱かった？ ごめんね」と声をかけると「うん。大丈夫」と言って

いた。その後すぐに、Hに「今、熱かったって言ってたよ。人に向けて花火持ったら駄目だよ」と言うと、Hがちこの腕を叩いてうーじのところに歩いていった。

日記では、「手持ち花火は楽しかった」と書き、白いスペースいっぱい魚やクジラ、クラゲなどの絵を描いていた。ちこが見に行こうとすると「こっちに來ないで」と言っていた。絵をうーじが見て、「Hは、何を書いているの？」と質問するとHが「お魚の絵。川のお魚」と言っていた。

就寝時間となり、自分のベットに入ると、家から持ってきたイルカの人形を抱えながら寝た。「今日は、楽しかった？ 明日も一緒に遊ぼうね」と声をかけると「うん。遊ぶ」と言って眠りに着いた。

## (2) 2日目

朝、起床すると、イルカを持って、玄関から一番に出て遊び場にあるハンモックに乗った。ハンモックの上では、イルカをなでたり、口に「ちゅっ」と言いながらキスをしていた。「今日は、川で遊ぶんだよ」というと、「川で遊ぶ」と大きな声で言っていた。その時に、ちこのひじをつまんできた。

朝の散歩では、散歩に向かう列が歩き始めると、自分から先頭をきって歩いていた。ずっと先頭を早足で歩いていたが、後ろの人たちが見えなくなると、見えるようになるまで待ってから歩いていた。また、分かれ道に差し掛かるところでも「皆、まだぁ」といいながら後ろの人たちを待っていた。

朝食では、ご飯にしょうゆをかけて食べていた。トマト以外は全部食べた。「おいしい」と言いながら食べていた。

川遊びでは、「お魚さん、見つける」と言いながら、ゴーグルをつけて泳いでいた。初めは人がいる所と離れた所を行き来しながら泳いでいたが、水をかけあっているR.Mやたくしん達を見て、「キャハハ」と笑いながら、水をかけに行った。

タクシンに水をかけられると笑いながら逃げているが、その後、2・3回水をかけに行っていた。

水の中を泳いでいる最中に川の底に落ちているペットボトルを見つけ、それを持って泳いでいた。立ったり、泳いだりを繰り返したあと、「お魚さん、つかまらない」と言って、また泳ぎ始めた。少しすると「お魚さん、いたー!」と言って、ペットボトルに魚を入れようと魚に近づけていった。しかし、逃げられてしまい、「あー、捕まらない」と水だけが入っているペットボトルをながめていた。昼食は、自分たちでマスを捕まえて焼いたものを食べた。Hは、ゆーじと一緒にマスを掴みに行き、両手でマスを掴みながら「ヌルヌルしてる」と言って見せにきた。マスが滑りやすく、何度も落とされていたが、その都度、Hは落とすマスを掴むということを何度も行っていた。Hはマスを焼くために、トトロから内臓のとり方を教わり、割り箸を使って、顔を引きつらせながら、内臓を取ろうとした。しかし、上手く内臓を取ることができず、「できない。もう、やだ。ゆーじやって」とゆーじにマスの内臓を取ってと頼んだ。

その後、焼きあがったマスとおにぎりを「おいしい」と言いながら食べていた。マスとおにぎりを食べ終わると、川辺にあったY.S達が作った手作りの温泉に入って、ペットボトルに水を入れては出しを繰り返していた。途中でプラスチックのコップを拾い、それを持って泳ぎ続けていた。それを繰り返した後、川の中に入り、午前中と同じように泳ぎ、大きな岩がたくさんあるところに着くと、その中の一つに座り、ペットボトルに水を入れ、その水をコップに入れたり、捨てたりを繰り返し、その最中にちこのひじをつまんだり、チューチューと吸ったりしていた。そのうちに5センチぐらいの石を見つけ、それを水でいっぱいになったコップに入れ、水がこぼれているのを目を大きくして見ていた。

石が入ったコップを「これ、ジュース」と言って、近くにきた人たちに渡していた。その人たち

が、飲んだふりをすると笑っていた。

遊んでいると「手が痛い」と言い、見てみると手がふやけて、指の間が少し切れていた。「手、痛いね。少しお休みする?」と聞くと、「大丈夫。お休みしない」と言って休もうとしなかった。

夕食後、Hはたっきーと一緒に研修室へ行き、「キャハハ」と笑いながら追いかけてこをしていた。

追いかけて終わると、赤いボールがテレビの後ろにあるのを見つけ、取ろうと何度も腕を伸ばしていた。そのボールは、Hがいる場所から少し離れた場所にあり、なかなか取れないでいた。そこで、ボールが取れる位置までテレビを動かすと、Hは赤いボールを取り、転がして遊んでいた。

お楽しみ会では、皆と一緒にゲームには参加しなかったが、研修室の後ろの隅に重ねられていた畳の上に上り、昨日見つけたダンボールを使い遊んでいた。畳の上で、ダンボールを持ちながら遊んだあと、スタッフや参加者の周りを歩きまわったり、途中で見つけた棒を回したり歩き回ったりしていた。スタッフや参加者の周りを何回か歩きまわったあと、研修室の後ろの方に座り、赤いボールをメガホン2個に交互に入れて遊んだり、赤いボールをゆーじやちこ転がしあっていた。

ダンボールを持ち、スタッフや参加者が座って作った円の真ん中に「はい!」と言いながら笑顔で走って置きに行っていた。

日記では、最初に名前を書いてから、魚の絵をたくさん描いていた。「それな?」と聞くと、「魚釣りの絵」と言った。文章を書いていなかったの、「今日は、何をしたっけ?」と聞くと「川遊びした。魚釣りをした。お魚さんにとって、食べた」と言って、その内容を書いていた。

就寝時間となり、自分のベットに入ると、川遊びの話などを少ししたあと、目が閉じそうになりながら「もう、眠い」と言って、すぐに寝た。

## (3) 3日目

朝、起きると、外へ向かい、ハンモックに乗った後、ブランコで遊んだ。ブランコから降りると、「ちこー」と甘えた声で言いながらひじをつまんだり、チューチューと吸う事があった。朝食では、ご飯にしょうゆをかけて食べていた。学習の時間には、折り紙で、鶴と魚を折った。鶴と魚の作り方がなかなか分からず、「わからない!」、「教えて!」などと大きな声で言い、ゆーじやちこ、やっくんに教わりながら完成させた。また、タクシン、やっくんの上に馬乗りしたり、叩いたりして遊んでいた。大声で笑っていた。ピザ作りでは、班から離れてピザを作った。自分で、ツナ、コーン、ウィンナーを山盛りにして作っていた。ピザのトッピングが終わり、窯でピザを焼いてもらっている間、「熱い。熱い」と釜の熱気を熱がっていた。ピザが焼き終わると、自分で席まで持っていき、「ピザ、おいしい」と言いながら食べていた。その時も、班からは離れてピザを食べていた。ピザを食べ終わった後、ちこやゆーじにつかまりながら木に立てかけられた太い棒の上を上った。途中、Hが「ちこ、ゆーじ、怖い、ちゃんと持ってって」と言い、「うん。ちゃんと持ってるよ」と言うのと、しかめた顔をしながら、ちこゆーじの腕をしっかりと持ち、登ったり降りたりを繰り返していた。

火起こしでは、やっくんから「H、この木の棒を入れてくれる?」と言われると、木の棒を何本も入れていた。木を何本も入れたあと、「ボンボン痛い」と腹痛を訴えていたが、焼いたマッシュマロを食べると、「ボンボン痛いのが治った」と言って、また木の棒を入れていた。カレーコンテストでも火の番を行い、初めのうちは「カレーは嫌い。しょうゆご飯で食べる」と言っていたが、ゆーじからカレーを渡されると少し食べていた。

## (4) 4日目

朝、起きると、ロビーにあるソファの上でうつぶせになって横になり、手をブラブラしたり、

起き上がってちこのひじをつかんで、「ん、ん、ん」と高い声を鼻から出していた。朝の係りについて話をすると「洗濯物をやりたい」と言っていた。

朝食では、味噌汁を自分で席まで運んでいる最中に、こぼしてしまい、「あー、熱い」と言っていた。側に言って、「H、大丈夫?熱いところ、お水で冷やす?」と聞くと、「熱いところ、お水で冷やす」と言い、流しのところで手を水で冷やしていた。自分の席につくと、お皿の上のしゃけを見て、「しゃけだ」と嬉しそうに言っていた。ご飯にしょうゆをかけて食べ、大好きなしゃけをおかわりしていた。

お昼には、手打ちうどんを作った。始めは、Hのグループの人たちの周りをぐるぐる回っていた。やっくんから「H、この中に木を入れるの手伝ってくれないかな?」と言われると「うん。やる」と言って、トングを持ち、何度も木を入れていた。やっくんから「H、もうそろそろ、入れなくてもいいよ」と言われたが、その後も木を入れ続けていた。Iに教えてもらいながら、うどんをきった。切っている最中にIに「教えてあげる」と言われたときに少し眉間に皺を寄せていた。

うどんを切り終わり、お湯の中にうどんが入り、蓋が閉められたのを見ると、その蓋を開けるように置いてあった木の棒を持って中をのぞいていた。うどんを「おいしい」と言いながら食べていた。

うどんを食べ終わると、木登りができる場所に向かい、「ちこ、手伝って」と言って、木の一番上まで登ったり、降りたりを繰り返していた。その後、広場で笑い声が聞こえ、Hがそっちに向かうと炭を顔につけられ「うー」と言って、炭の着いた方の顔を手で触った。スタッフや子供たちが、炭を着けあっているところを歩き回り、何度か炭を顔に着けられたあと、水道のあるところまで行き、顔を洗っていた。自分の顔を洗い終わると、「ちこの顔も汚れてる」と言いながら、ちこの顔に着いている炭を水で洗い流した。「ちこの顔を

洗ってくれるの？」と聞くと、「うん」と言った。

そのあと、トトロの近くに行くと、トトロから炭をもらい、たくしんやアツシの背中に炭を着けに行き、たくしんやアツシに炭を着けられると高い笑い声をあげて、走り回っていた。

夕飯のあと、お楽しみ会があったが、Hは参加しなかった。ロビーの床に寝そべり、囲碁を並べたり、ジェンガを並べて、倒したりしていた。ゆーじがHの名前をジェンガで作ったものを見せ、「これなんて読む？」と聞くと「Hの名前だよ」と笑顔で言っていた。その遊びを繰り返した後、仰向けになって寝てしまった。日記では、うどんの絵を描き、うどんを作ったこと、木に登ったこと、顔を黒く塗ったことを書いていた。21時の就寝の時間に部屋に行くと、Hがつぶやいた「ワイルドマリーン」という言葉を同部屋のIやSが大きな声で言い合っていた。

#### (5) 5日目

朝起きると、ロビーのソファーに向かい、仰向けで寝っころがり、手遊びをしていた。その手遊びをしながら、甘えている声で「ちこー、ちこー」とちこのひじをつまんだり、チューチューと吸ったりしていた。

朝食のあと、外に出ると、広場の周りを歩いていた。ちこが、追いかけていき、「H、皆、あっちにいるから皆のところに行こう」と声をかけると、Hは、「いい」と言って、皆のところへは行かず、広場の周りを歩き続けていた。

チャレンジハイクが始まると、一番前を歩き、「あんまり前に行くと、みんなから離れちゃうよ」と言うと、黙ったまま、前を歩き続けていた。隣を歩いていると、「ちこと一緒に嫌」「ちこなんて大嫌い」といいながら早足で歩いていた。その後、ゆーじと笑顔で歩いていた。お昼休憩では、お弁当をトマト以外は綺麗に食べた。山登りでは、「疲れる」「もうやだ」と言いつつ登っていた。山頂に到着すると、「オー！」と何度も言っていた。

夕ご飯は、バーベキューをした。Hは、炊事場に行くと、すぐにトングを持ち、薪を石釜の中に何本も入れていた。やっくんに、「今日は、火お越しはしないから、薪は入れなくても大丈夫だよ」と言われたが、その後も薪を入れていた。その後、バーベキューで鉄板の上に肉を置こうとしたら、火傷をしてしまい、「これだからバーベキューは嫌いなんだ」と言っていたが、「焼いた肉おいしい」と焼肉を食べていた。

バーベキューの後、別れの集いが行われた。キャンプファイヤー上に向かう前、他の参加者が並んでいるところに「H、並ぼう」と言うと「いやだ」と言って、歩き回っていた。ブッキーがHに「H、今から一緒に行きます」と言い、ブッキーと一緒にキャンプファイヤー場まで歩いていった。キャンプファイヤー場では、Hは石をいくつも投げていた。シェアリングの時に、Hは、「おいしいごはんをたくさん食べたい。お母さんとお父さんと皆で一緒にいたい」と話した。また、泣いていたちこを見て、「泣かないでちこ。ちこ、ごめんね」と言っていた。シェアリングが終わると、キャンプファイヤーに木の枝を何本か投げ、トトロから薪を受け取ると何本も入れていた。別れの集いが終わると宿泊施設まで走って帰った。日記には、別れの集いでのことを書いた。「キャンプファイヤー」を「きゃんぷfire」と書き、「ん」の最後のところを渦巻きのように書いていた。21時の就寝時間の時に、「明日、お家に帰るんだよ」とHに言うと、「お家に帰るの？ 川で遊びしないの？」と聞いてきた。「うん、明日は帰るから、川遊びはしないんだよ。寂しい？」と言うと「うん。寂しい」と言っていた。「でも、明日はお母さんに会えるよ」と言うと、笑顔になり、「お母さんに会いたい」と行った。「じゃあ、お母さんと元気に会うために、もうそろそろ寝ようか」と言うと、「うん」と言って眠りについた。

## (6) 6日目

朝起きると、遊び場にあるブランコに乗りに行った。ブランコに乗ったあと、木に登ったり、降りたりを繰り返していた。朝ごはんは、ごはんをおかわりし、2杯ともしょうゆをかけて食べていた。朝ごはん後、玄関にあるソファで横になって、「んー、んー」と鼻唄を歌っていた。その鼻唄の合間に、「ちこー、ゆーじ」と言いながら、ちこのひじを触ったり、チューチューと吸っていた。

昼食では、鹿沼サンドを同じグループのメンバーと一緒に食べた。パンにハムを8枚とチーズ一枚をはさんで「おいしい」と言って食べていた。

帰りのバスには、一番に入って行き、一番前の窓辺に座った。ちこが、一緒にバスの中まで入っていくと、「何で、ちこと一緒になの?」と言っていた。その後、ゆーじと一緒に座った。バスが発進してから、30分ほど経ったあとに、Hが「もう終わりだぁ!」と何度も大声で言ったり、「これからどこに行くの?」と聞いてきた。「これから、お母さんが待っていてくれるところに行くんだよ」と言うと、「お母さんに会えるの? 早く会いたい」と言っていた。1分ぐらいの間を空けて、何度もこの質問を繰り返していた。

バスが当大学院に到着すると、Hが一番に降りた。お母さんの顔を見ると、駆け寄っていき、「お母さん、会いたかった」と言ってニコニコしていた。お母さんと一緒に帰る時に、「H、元気でね。楽しかったよ」と言うと、Hが「ちこー」と言って、ひじに触ってきた。その後、Hと一緒に記念撮影をしたあと、「H、バイバイ。またね」と言うと、Hは「バイバイ」と言い、お別れをした。

## 4. 事後アンケート

以下は、後日回収した母親からのアンケートの報告である。サマースクールでよく話題になった事柄は、川遊びの事や、母親がサマースクール後に行われる学校の自然教室のことを話すと「ちこ

とゆーじも一緒に来るの?」と話していたということである。印象に残ったことは、木登り、ピザ作りである。サマースクール後の生活習慣や対人関係などの行動で変化はなかった。

## III. 考 察

## 1. 心理的居場所

大久保(2000)によると心理的居場所とは、“ありのままの自分らしくいられる居心地の良さ(内的要因)と対人関係からくる居心地の良さ(外的要因)とからなる主観的な居心地の良さを得られる空間”としている。Hは、この援助的サマースクールの中で、スタッフや参加者との関わりの中で、自分らしく過ごせるようになり、自分からスタッフに対して関係を持つようしたり、グループのスタッフや参加者と行動を共にするようになったのではないかと考える。

1日目は、開会式の時や施設探検ラリーのときに、グループと一緒に行動はせず、Hが一人で行動することが多く見られた。しかし、2日目からH自身から少しづつスタッフや参加者と関わりを持つようになっていく。2日目の川遊びの際に、水をかけあっているタクシンに対して、自分から水をかけに行き、夜のお楽しみ会(ゲーム大会)では、ゲームに参加はしなかったが、スタッフや参加者が座って作った円の真ん中にダンボールを笑顔で置きに行っている。3日目では、お昼のピザ作りでは、Hがグループから離れてピザ作りを行い食べていたが、火起こしからやっくんの働きかけによってグループのスタッフや参加者の側で薪を何本も釜に入れており、2日目に比べてグループとの距離が近くなったように考えられた。

また、4日目では、うどん作りの際に同グループの参加者Iに教えてもらいながらうどんを切ったり、Hのつぶやいた「ワイルドマリーン」という言葉をIやSが真似をして言うという行動が見られ、同グループの参加者との関係をH自身の発

言とIからの教えるという関わりにより、同グループの参加者との間に対人関係での居心地の良さを得たのではないかと思う。そして、5日目のパーベキューと6日目の鹿沼サンドでは、同グループの参加者やスタッフと一緒に、作るところから一緒にいることから、この援助的サマースクールの期間を通して、同グループの中に心理的居場所を得ていったのではないかと考える。

## 2. 甘え行動

この援助的サマースクールの期間中、Hは、ちこ(私)のひじをつまんだり、チューチューと吸ったりする反面、「ちこ、嫌い」「ちこ、嫌」などと嫌悪を示すことも多々あった。小林(2004)は、自閉症児の関係欲求が満たされて、甘えることによる心地よさを体験することにより、彼らの甘えたいという気持ちが強まっていき、声は甘え声になっていく。次第に彼らは自分の欲求に沿って自由に行動していくが、そこでは欲求が満たされて心地よい状態を体験すると同時に、満たされなため不快な状態も体験するようになる。こうして次第に、快・不快の情動が明快に分化してゆき、養育者は、子どもの気持ちを感じ取り、気持ちの変化を感じ取り、移し返していくという関わりを求められるとしており、Hはちこに対し、この快・不快の情動を体験したのではないかと考える。Hは、2日目から朝や川遊びをしているときなど、リラックスしているときに、甘えた声を出しながらひじをつまんだり、吸ったりしている。このひじをつまむという行為は、1日目に母親から伝えられたように慣れた人に対して行われるとしており、この行動は、甘えたいという欲求が行動として表れていたのではないかと考える。また、「ちこ、嫌い」や「ちこ、嫌」という言語表現は、Hがちこに自分の行動を受け入れてもらえないという気持ちから表れていたのではないかと考える。

## IV. 終わりに

H.Sにとって、このサマースクールでの6日間は、自分らしくいられた時間であったと同時に、スタッフや参加者と共に過ごす大切な期間となったのではないだろうか。私は、サマースクールで、H.Sと関わっていくなかで、H.Sとどのように関わっていけばよいか分からず、戸惑ってばかりいた。振り返ってみると、私は「ありのまま」「見守る」という姿勢でH.Sの側にいるのではなく、どうすればよいかと考えてばかりいたように思う。H.Sの存在を少しでも感じられたと思ったときには、5日目になっていました。その時に、今まで、H.S自身を見ようとしていなかった自分を後悔し、もっとH.Sに関わりたと思いました。

このことに気づくきっかけを下さった先生、SVrの方々、スタッフの皆様そして、このような貴重な経験をさせてくれたH.Sに感謝いたします。

## 引用文献

- 石崎一記ら 2010 援助的サマースクールの研究IX(その1～その11) 東京成徳大学臨床心理学研究 10号 40-121.
- 大久保智生 2000 心理的居場所に関する研究(1): 概念の検討と尺度の作成 日本性格心理学会発表論文集(8) 92-93.
- 小林隆児 2004 自閉症とことばの成り立ち—関係発達臨床からみた原初的コミュニケーションの世界 ミネルヴァ書房 218.